

Wittgenstein の概念的探究と「形而上学」批判の展開

入江 俊夫 (Irie Toshio)

東京医療保健大学・東邦大学 (非常勤講師)

後年も含め、ウィトゲンシュタインの哲学を「形而上学批判」として要約することは大方の賛同を得られるであろう。しかし、それはいかなる意味で、であろうか。日常言語における現行の「文法規則」を逸脱した言語使用に対する批判という意味であるとすれば、大方の哲学的関心が失われることは言うまでもない。

この問いに対して、次の所見が手がかりとなる。

哲学的探究、それは概念的探究である。形而上学について本質的なこと、それは事実的探究と概念的探究の区別が明らかではないことである。形而上学的問いは、問題となっているのは概念的な問いであるにもかかわらず、常に事実的な問いの見かけをとる。(RPPI- I¹, § 949)

これは後年に記されたものであるが、私見では『論理哲学論考』以来のウィトゲンシュタイン哲学の基調と考えられる。本発表の課題は、この所見で述べられている「形而上学」と「概念的探究」(言語哲学)の対立が深みを増しつつ展開していく様子を観察・考察し、最終的にはウィトゲンシュタイン哲学の展開から、「空想的プラトニズム」に対する批判と、概念ないしは概念的連関の可視化というモチーフを取り出すことである。とりわけ、ウィトゲンシュタイン的な意味での「形而上学」とは、“Darstellungsweise”に属する事項を考察対象に投影し、考察対象自体の本質的特徴であると誤認してしまうこと、ここでの“Darstellungsweise”は狭義の言語だけではなく、考察方法や見方も含んだ厚みのある意味(「像」(Bild)や連結項としての「言語ゲーム」とも直結する)で理解すべきことを中核的な論点とし、近年、研究が進み、従来考えられていたよりも複雑なものであることが判明しつつある「中期」ないしは「移行期」の思考を大きく扱いながら論じる予定である。²

¹ Wittgenstein, Ludwig. *Remarks on the Philosophy of Psychology*, vol.1. G.E. Anscomb & G. H. von Wright (eds.), G. E. Anscomb (tr.), Basil Blackwell, 1980. 佐藤徹郎 (訳), 『心理学の哲学1』(ウィトゲンシュタイン全集補巻1), 大修館書店, 1985年。

² 本研究は、公益財団法人風樹会の助成を受けた研究成果の一部である。